交通バリアフリーニュース

第１１回 バリアフリー推進四国地域連絡会議を開催

～香川県高松市～

日　　時：平成 30 年２月 26 日（月）１３：３０～１５：３０

場　　所：高松サンポート合同庁舎　［低層棟２階アイホール］

出 席 者：徳島大学大学院 近藤光男教授、

近畿大学理工学部社会環境工学科 柳原崇男准教授、

公益財団法人香川県視覚障害者福祉協会、

公益財団法人香川県身体障害者団体連合会、社会福祉法人香川県手をつなぐ育成会、

四国ろうあ連盟、全国脊髄損傷者連合会 香川県支部、

一般社団法人日本発達障害ネットワーク、

四国旅客鉄道株式会社、四国鉄道協会、四国バス協会、

四国旅客船協会、四国ハイタク協議会

四国各県バリアフリー担当者、高松市バリアフリー担当者

四国運輸局と四国地方整備局は、高松サンポート合同庁舎において、「第１１回バリアフリー推進四国地域連絡会議」を開催しました。

この会議は、関係する施設設置管理者、当事者団体、有識者、行政等が一堂に会し、バリアフリー法に基づく取り組みの現状把握、課題の抽出、先進事例の紹介、対応方策の検討や提案など、バリアフリー化の推進に向け知見の共有を図るとともに、互いにより良い協力関係を築き、連携してバリアフリー化の一層の進展に寄与することを目的に開催しています。

会議には３５名が出席し、徳島大学大学院の近藤光男教授を座長に、バリアフリー法の一部を改正する法律案の概要報告、行政の取り組み報告、四国運輸局優良事業者等表彰、意見交換などが行われました。

意見交換では、「緊急時における聴覚障害者に対するホームでの誘導・情報の見える化」「困っている人を見かけた際の乗客同士による声掛けの啓発」「四国地方整備局・四国運輸局のバリアフリー教室の内容・回数の拡充」などの意見要望等が出されました。

会議での意見・要望等は、今後のバリアフリー施策に反映していくとともに、ハードとソフトの両面からのサポートが大事だということを再認識しつつ、さらに関係者が連携してバリアフリー化の推進を図っていくことが確認されました。

会議の冒頭には、あらゆる人がストレスなく観光を楽しめる観光地を目指してバリアフリー化を推進している愛媛県内子町に対し、福祉・バリアフリー対策への多大な貢献が認められ、四国運輸局長から表彰状の授与が行われました。詳しい取組内容につきましては、page７からの消費者行政インタビューをご覧ください。

また、「タウンモビリティステーション　ふくねこ」を運営されているバリアフリーリーダーの NPO 法人福祉住環境ネットワークこうちの笹岡理事長様より活動報告をしていただきました。

愛媛県内子町様への表彰状授与

愛媛県内子町様による事例報告

NPO法人福祉住環境ネットワークこうち様
による活動報告

四国運輸局が新庁舎に移転しました！

～庁舎バリアフリー設備の紹介～

四国運輸局は平成 29 年 11 月 27 日に高松サンポート合同庁舎南館に移転しました。

新庁舎はＪＲ高松駅に近接し、高齢者や身体に障がいをお持ちの方にも使いやすい建物として整備されましたので紹介します。

《施設内のバリアフリー》

①点字ブロック

JR高松駅及びシンボルタワー側からエントランスまで点字ブロックがあります。

合同庁舎敷地内では点字ブロックに沿って、音声案内をしています。

②エレベーター

メインのエレベーターでは、車いす対応・視覚障がい者対応(階数の点字表記)となっています。

③ゆったりトイレ・多機能トイレの設置

・ゆったりトイレ　→車いす使用者及び、誰でも使用できるトイレ

・多機能トイレ　　→オストメイト対応洗浄設備、ベビーチェア、介助シートが設置されています

〈ゆったりトイレ〉

共　用　　→1、2階

男子用　→　3階以上の偶数階

女子用　→　3階以上の奇数階

〈多機能トイレ〉

1階　/　男子用・女子用　各1カ所ずつ

※トイレには聴覚障がい者の方へ火災を知らせるためのパトライト(赤色灯)を設けています

お車でお越しの場合は、身体に障がいをお持ちの方や・高齢者等が利用できるゆったり駐車場・車いす専用駐車場を設けています。また、庁舎内にて貸出用車いすがありますので、ご利用の際は１階玄関合同庁舎受付にお申し出ください。高層棟南館 1 階には、授乳室もございます。

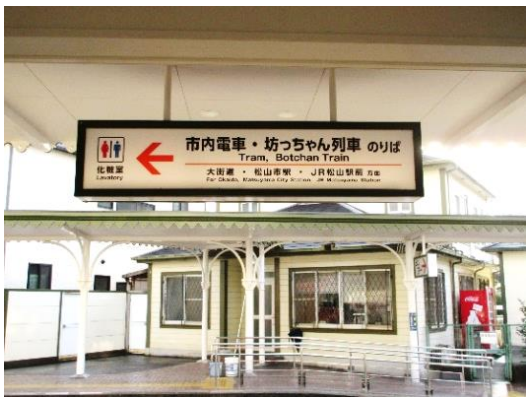
伊予鉄道　道後温泉駅におけるバリアフリー化について

四国における旅客施設については、平成２３年３月に改正された基本方針により、平成３２年度までにバリアフリー化の実施を目標とされた１日当たりの平均的な利用者数が３，０００人以上の旅客施設を含め、事業者、国及び地方自治体との連携等によりバリアフリー化が進んでいます。

平成 29 年 12 月、道後温泉の玄関口として観光客の誘致の一端を担う、伊予鉄道　道後温泉駅において、駅舎リニューアルに合わせて、多機能トイレの新設やスロープ及び点字ブロックの整備等、構内のバリアフリー化が図られました。

●今回バリアフリー化された設備●

整備されたスロープ（写真上）及び
点字ブロック（写真下）



英語表記の案内図

新設された多機能トイレ

徳島阿波おどり空港でバリアフリー教室を開催

平成３０年２月６日(火)、大阪航空局徳島空港事務所と四国運輸局の共催で、徳島阿波おどり空港（板野郡松茂町）において「バリアフリー教室」を開催しました。

教室には、徳島阿波おどり空港関係従業員１９名が参加。徳島県立障がい者交流プラザ・視聴覚障がい者支援センターから講師をお招きして、視覚障がいについて学ぶ座学講習とアイマスクを着用した視覚障がい者疑似・介助体験を実施しました。

教室では、はじめに座学講習を通して視覚障がいについての基礎知識を身につけたあと、疑似・介助体験により移動時の困難な点を学びました。また、介助する際は、障がい者本人がどのような介助を望んでいるかを確認してから対応すること等、体験を踏まえて今後の接遇や介助の大切さを改めて認識していただきました。

参加者は、今回のバリアフリー教室で、さらなる「心のバリアフリー」の推進と、安全で快適な公共輸送機関のサービス向上を目指すことを確認しました。

船舶における高齢者等の安全講習会を開催

平成 30 年 2 月 22 日(木)、一般社団法人 日本旅客船協会と四国運輸局の共催で、「船舶における高齢者等の安全講習会」を行いました。この講習会は、日本における高齢化や 2020 年のオリンピック・パラリンピックの開催を見据えて、高齢者や障がいのあるお客様等に安全で快適な船旅を楽しんでいただくことを目標として船員及び海事関係者を対象に開催されました。

第 1 部の座学では高松サンポート合同庁舎内で、障がいのある方をお手伝いする際に気を付けてほしいことやサポート方法についての講演があり、第 2 部の実践実技研修では四国急行フェリー内において、高齢者、車いす利用者、視覚障がい者それぞれの疑似・介助体験と手話講習を行いました。

手話講習

車いす利用者疑似･介助体験

（段差の乗り越え方）

疑似体験の際は、高齢者疑似体験セットやアイマスクを身に着けて実際に船内を歩くことで、障がいのある人が不安に思う点やサポートを必要とする場面を学びました。

また、手話講習の際に、障がいのある方が旅行をする時には、事前に利用する輸送機関や宿泊施設について SNS 等を通じて調べることが多いので、常日頃よりお客様の側に立っての対応を心がけて欲しいことや、手話で歓迎の意を述べたり、筆談で会話をするといった些細なことでもお客様の印象に残ったり喜ばれたりするので、少し勇気を出して接してほしいというお話がありました。

交通バリアフリー疑似体験研修会を開催しています

～（一社）愛媛県バス協会の取り組み紹介～

一般社団法人 愛媛県バス協会（会長 清水 一郎）では、交通バリアフリー対策事業及び乗合・貸切バスの輸送改善対策の一環として、特定非営利活動法人「わをん」の協力を得て、同法人が所有している高齢者疑似体験セット（シニアシミュレーター）を活用して乗務員等が高齢者の移動の困難さを理解し、輸送サービスの向上と安全性の確保に努めることを目的として、２００４年から交通バリアフリー疑似体験研修会を実施しております。

今年度は、平成３０年１月２９日（月）に南予地区、３月９日（金）に中予地区、３月１５日（木）に東予地区においてそれぞれ実施されました。

教室には、各地区から、乗合・貸切バスの会員事業者の乗務員及び監督指導者等が参加。「わをん」の講師の指導のもと、高齢者疑似体験と視覚障害者体験、認知症サポーター研修が行われました。

高齢者疑似体験では、脚やひざに重しを付けるほか、耳栓、ゴーグル、手袋等を付けることで、お年寄りがバス利用時に感じる不自由さを体験し、視覚障害者体験では、アイマスクを装着して、目の不自由な方が必要としているサポートについて考えました。また、認知症サポーター研修では、認知症をもつ人の視点によるビデオを通して当事者の不安感や怖さを学び、認知症のあるお客様に対してどのような心配りが求められているかを確認しました。

参加した乗務員からは、「耳が聞こえにくいと困ることも多かったので、電話対応の際はゆっくり、はっきり、低い声での会話を心掛けたい」「体の不自由な方や認知症のある方への理解が深まり、どういった場面が困るかを学ぶことができた」といった声が挙がりました。

高齢者疑似体験（運賃支払い）⇒

⇐視覚障がい者疑似体験

高齢者疑似体験（バス降車）

消費者行政インタビュー

四国運輸局では、消費者ニーズや消費者行政上の課題を把握し、その結果を行政に役立てていくことを目的として公共交通機関の利用者等を対象にインタビューを行っています。

あらゆる人にストレスのない観光地を目指して　（No.47　１月発行）

今回は、行政と住民が協働して、多くのあらゆる観光客にストレスなく楽しんでいただく観光地を目指している取組について、内子町ビジターセンター所長の中岡紀子さんにお話しを伺いました。

インタビュー

まず、内子町の観光資源についてお聞かせ下さい

内子町は１９８２年に、約３．５ha ６００mに向かい合う建物、約１２０棟のエリアが国の重要伝統的建造物群保存地区の選定をいただきました。その選定が、内子町の文化観光振興のスタートになりまして、町並みの凍結保存ではなく生かして使う、現代的再生を果たして、今の暮らしや今の人びとに感動を与えられるような施設づくり、ひいては文化観光を展開していきましょう、ということで、町長事務部局に保存修理なおかつ活用というミッションを与えた町並保存対策室という部署が作られました。

町並保存対策室では、「木蝋資料館　上芳我邸」を中核にし、国の重要有形民俗文化財指定を受ける業務を行い、指定後は、上芳我邸内の木蝋資料展示棟での企画・展示などを行いました。ちなみに木蝋とは櫨の木の実からできる天然の油脂で、蝋燭の原材料になるのですけれど、鬢付け油ですとか化粧品、ポマードなどにもなります。

木蝋資料館　上芳我邸

内子町では八日市・護国地区の町並み、特に内子座が有名と伺っていますが、その魅力について詳しく教えて下さい

観光客でにぎわう内子座

八日市・護国の町並みは、商店街に隣接して約６００mあります。そこには、先ほどお話ししました木蝋資料館があり、少し離れた所に内子座があり、多くの落語家や歌舞伎役者が舞台を披露するために訪れます。

内子座は、大正時代に建てられた劇場で、文楽などの興行により栄えていましたが、映画館となるなど、変遷を経て、老朽化により取り壊す計画がありました。町並み保存運動に伴い所有者から町に譲り受け、昭和５８年から３年をかけて、創建当時の姿に改修し、平成 27 年に国の重要文化財指定を受けました。

内子座は、カラオケや日本舞踊、コーラスなど、地元の合同芸能発表会を披露する場でもありますし、ピアノを習っている方たちの発表会であったり、あるいは、一流の落語家や歌舞伎役者、国立劇場の技芸員を招いて質の高い文楽を披露したりします。

最初は慣れなかった地元の出演者も、そのうち落語で使う演目を書いた「めくり」を自分たちで準備したり、アナウンスをしたり、プロのような舞台演出が出来るようになりました。劇場がひとつあるだけでスタッフが育ち、演じる人たちもその気になって、有名歌舞伎役者が演じた舞台に恥じないようにと、頑張っています。また、ビジターセンター裏に、愛媛県立内子高等学校があるのですが、郷土芸能部がありまして、和太鼓を叩きます。作曲も練習も太鼓の種類も自分たちで全部情報収集して作り上げています。郷土芸能部の成果発表会を年１回内子座で行っているのですが、親兄弟達が観客として集まり、２階観客席からは紙吹雪がまかれるなど、大いに盛り上がります。

内子高校郷土芸能部の上演

観光客も楽しみにしている内子座ですが、このほかに徒歩圏内でおすすめの場所はありますか

この通り自体が商業の街なので、大正１０年頃の商いの様子を人形と物で当時の状況を展示した、「商いと暮らし博物館」が、おすすめのひとつです。人が近寄るとセンサーで感知し「おいでなはい」と、方言で声を掛けてきます。

商いと暮らし博物館

方言と言いますと、ビジターセンターが、「Ａ・ｒｕｎｚｅ-あ・るんぜ」という愛称で呼ばれています。また、まちの駅が、「Ｎａｎｚｅ（なんぜ）」と呼ばれていますが、れっきとした日本語です。そもそも、内子座が復元されたあと、素人の青年たちが、「ＡＵＧＨＡＮＣＥ（オーガンス）」という劇団を立ち上げました。オーガンスというのは異国情緒たっぷりに聞こえますけど、「おおがんすたれ」と言いまして、このあたりでは、大ボラ吹き、大風呂敷を広げる、出来もしないことをまことしやかに言って大嘘をつく人のことを指します。「おおがんすたれ」から、夢があってもいいじゃないか、虚構の演劇をやってやろうじゃないかということで名付けられました。また、方言が、かわいらしいアルファベットやカタカナだと、地元では当たり前の音の響きが、視覚化することにより非常に異国情緒を醸し、地元の方言を見直すことが流行り、商工会青年部の若者達が、「Ｎａｎｚｅ」と名付けました。「なんぜ」は「ありません」という言葉ではあるのですが、行きつけの商店にふらっと入ると、特に子ども達が入ると、商店のおかみさん達が「なんぜ？今日は何か用かい？」と声かけをするときのあいさつ兼おもてなしの言葉ということで、まちの駅「Ｎａｎｚｅ（なんぜ）」になりました。でも、「なんぜ」では「ｎｏｔｈｉｎｇ（ない）」に伝わるので、「ないことはない、内子の魅力はたくさんあるのですよ」という対の意味を込めて、ビジターセンターは愛称が「あるんぜ」になりました。

アマチュア劇団「オーガンス」の上演

少し距離を伸ばせば、美しい風景も見られると伺っていますが

ここから約１４ｋｍほど離れたところの石畳地区の屋根付き橋や泉谷地区の棚田も見所です。石畳地区に来られた方は皆さん異口同音に牧歌的で丁寧な地域づくりをされているということで、評価が高いです。農家を移築した石畳の宿は、海外の方にも人気で、滞在の拠点である宿が増えていくといいと思います。

外国から来られた方はインターネットサイトやガイドブックの情報を頼りに内子町に来られますが、四国運輸局さんが、四国遍路に力を入れられていますので、海外から内子町を訪れる方が非常に増えております。中には、遍路参りの方の立ち寄り先もあり、平成２８年には３，７６７人の外国人観光客が内子町に来られ、そのうち約３００人の方が宿泊されています。

石畳地区の屋根付き橋

泉谷地区の棚田

ちょうど今、観光ガイドの方が団体を案内してきましたね。観光ガイドを希望される方はどれぐらいですか？また、最近は外国から来られる方が多くなりましたが、多言語によるガイドはどうですか？

平成２年から町の有志の皆さんが「町並みガイドの会」を結成し、一生懸命勉強していただいて、ボランティアで年間約４，０００人から６，０００人の方をガイドしています。また、外国から来られる方に対応するための「外国語ガイドの会」という組織があり、登録した方でも差はありますが、ヒアリングできてすぐ答えられる方が３～４人ぐらいおられます。駆け出しの方は、内子座だけのガイドをやっていただき、ふつうはガイドさん１人で２０～３０人の方をご案内する目安ですが、多いときには４０～６０人の方を２グループに分けてご案内しています。

地元住民ボランティアによる外国語ガイドの様子

中岡さんが所長をされています、内子町ビジターセンターについてお聞かせ下さい

内子町ビジターセンター

平成２１年度に四国運輸局さんが実施されました、「内子町における観光まちづくりコンサルティング事業」において、旧内子町図書館の観光事業での活用として、旧図書館を内子についての情報提供、地域への案内が出来るビジターセンターとしての活用が提案されましたので、これを具体化しました。

ビジターセンターの空中展示

ビジターセンターは、１階と２階の断絶を防ぐためにけんか凧や笹飾りなどの空中展示を行い、その展示に驚かれる方は質問をされます。「七夕過ぎているのに、どうして笹を飾っているの？」とか。なので、実は一月遅れで、雛送り（※）も３月３日ではなくて４月３日なのですよと。とにかく、質問をされる方は脈があると思います。それでも、あまりべたべたしすぎると敬遠されるので、つかず離れず、基本、質問があった時だけ対応し、ヒントになるものだけをお示しして、後は自由に見てもらい、次々に質問が出始めると、２階も見ていただく。普通だったらトイレ休憩だけ５分で終わりですが、３０～４０分ゆっくりご覧になる方もおられます。様々な質問を受けますので、こちらもアンテナを立てて、お客様の興味に伴走して、知りたいことを上手にお届けするようにしていますが、判で押したような答えもありませんので、ビジターセンターの職員は、毎日が試行錯誤です。もちろんお叱りも受けますので、極力礼節をわきまえて内子町のファンになっていただくための入り口として、他にはないおもてなしや接遇が出来るように、今までの経験値を踏まえながら、まっさらでお客様を受け入れています。

私たちは、行政と接客業の兼務ですけれども、救われるのは、接遇やおもてなしの力が身につくということ、それと、実際に観光客のニーズを肌で感じることができる、政策でやっていても、それは本当に必要なのだろうかというローリングができる、小さい町だからこそできるということですね。

バリアフリーの取組についてお伺いしますが、車いすを利用される方が来られたらどのような対応をされますか

内子座の中にはさすがにお入りになれないので、外観だけの解説になりますが、パネルを使って説明したりしています。お手洗いは、清正ひろばや町並駐車場にある車いす対応トイレを使っていただくことができます。清正ひろばにある、古民家風の多目的トイレは、国土交通省の街並み環境整備事業で整備されました。建物そのものは文化庁の国庫補助事業で整備され、伝統的な町並みの景観に併せて新しく建築された民家です。

古民家風に整備された、清正ひろばの多目的トイレ

このほか、車いすの貸出を町並駐車場で行ってほしいというご要望もあり、町の社会福祉協議会から借りて常備し、散策が終わりましたら、お客様のご都合がよろしい場所へ取りに行っています。貸出のご要望が頻繁であれば、あらかじめ社会福祉協議会から借りておく場合もあります。また、地域のお店が店の前に車いすを置いて、車いすをお使い下さい、と表示しているところもあります。これも乗り捨てＯＫで、地域住民がすごく協力的です。

車いす貸出のシステムもありますし、町民の方の厚意により無償で車いすを提供いただいています。健常者だけでなくお身体が不自由な方々にも旅を楽しんでいただこうという気持ちが、住民のみなさんにあるということが非常にありがたいです。

商店街店舗における車いすの無償貸し出し

最後になりますが、内子町は今後どのように進化していくのでしょうか

商業活動の二世が帰ってきていらっしゃるので、商店主の方が観光客に向けて、新しいサービスとかメニューとか何か仕掛けをしてもらえたらいいなと思います。イベントを商業のかたちでの切り口を作って、お客様を取り込むようなアイデアを出してきたらいいなと思います。９月２３日にドイツフェスタをするのですけど、ドイツのローテンブルク市と姉妹都市になりまして、それを記念してドイツの文化を知ろうという催しです。ドイツのお食事とかビール、ワイン、それから、おもちゃや民族衣装に触れていただくなど、ドイツに特化したイベントであり、そこでも内子町の料飲組合のみなさんがドイツメニューに挑戦されたので、どうして内子でドイツメニューなんだろうということ、それがおもしろかったと思います。

観月会などは、行灯が揺れて通りが幻想的になり非常に喜ばれるので、ここで着物を着て歩きたいというご希望が以前からありました。その着物を着るプロジェクトは地域おこし協力隊が作ってくれています。

先日、フランスのジャーナリストのみなさんをお招きしたときは、１９０ｃｍくらいの男性が着物を着てみたら、着物の丈が短くて足が出ていて、身長もお聞きして合うサイズを探してみたのですが見つからなくてお気の毒でした。海外の方でもアジア圏の方は着物がお好きで、先日も台湾の方が着物体験だけのために来られ、楽しみにしていたと仰っていて、とても似合っていらっしゃいました。

観月会期間中の幻想的な町並み

内子町の伝統的な町並みの景観と内子座でのアート的な活動と里山とか田園とか、そういうものを組み合わせて、あまり奇をてらわないけれど、日本の文化要素があります、みたいな「内子絵巻」を打ち出して支持を得たらありが

たいと思います。
　種まきは、最初は「えっ？」という意表をつくことでも、長年繰り返していると定着できるのかなと思います。

インタビューを終えて

　内子町では昭和５７年以来３０年以上にわたり、内子というブランド確立のために、地域住民の方と協働して頑張っていらっしゃるということが大変よく分かりました。特に、バリアフリーやユニバーサルデザインということになりますと、どうしても行政主導ということになりがちですが、住民の方も行政の施策に積極的に関わっていらっしゃるということは、まさに「内子デザイン」と言えるのではないでしょうか。

インタビュー実施日：平成２９年７月１９日（水）・聞き手：小野、竹内

（※）流し雛と同じ。３月３日の節句の夕方、雛人形を川や海へ流すこと。

みなさんからのご意見・ご投稿をお待ちしています。バリアフリーに関するものならなんでも結構です。四国運輸局消費者行政・情報課まで、ＦＡＸまたはメールでお寄せください。

〒７６０－００１９　香川県高松市サンポート３番３３号
高松サンポート合同庁舎南館（４F）
電話　０８７（８０２）６７２７
FAX　０８７（８０２）６７２３
Email: skt-Shikoku-shohisha@ml.mlit.go.jp

国土交通省

四国運輸局ホームページも是非ご覧ください　http://wwwtb.mlit.go.jp/shikoku/

このニュースは、交通バリアフリー関係の話題を中心に、四国４県自治体のバリアフリー関係担当部署、交通事業者及び地域のＮＰＯの方にお送りしています。このニュースの配信につきまして、配信先の追加、変更や停止をご希望される方は、お手数ですが本メールの返信機能でご連絡ください。